

宍粟市 地域おこし協力隊
つながる、ひろがる



地域おこし協力隊レポート

Learn about

Fukuju Koki

Utsumi Yoshiharu

Hirose Kazuma

Tanaka Soki

Hirose Yuya

Kamasu Yume

Community-Reactivating Cooperator Squad



市民生活部 まちづくり推進課

〒671-2593 宍粟市山崎町中広瀬 133 番地 6

TEL : 0790-63-3123

MAIL:machizukuri-ka@city.shiso.lg.jp



もくじ

宍粟市 DATA — 地域おこし協力隊とは	2
森を舞台に、人を呼び込むアウトドア拠点づくり 「福壽 晃希」	4
釣りを呼び水に、繁盛の自然を活かした地域挑戦 「内海 慶春」	6
協力隊から起業へ — 宍粟で挑む新しい観光 「広瀬 和磨」	8
世代を超えて広がる、共創の地域デザイン 「田中 惣規」	10
移住者の声を発信、地方が拓く新しい生き方 「廣瀬 有哉」	12
星空と生き物に囲まれて、20歳で挑む協力隊 「釜須 優夢」	14
地域おこし協力隊 OB・OG その後の活動	16



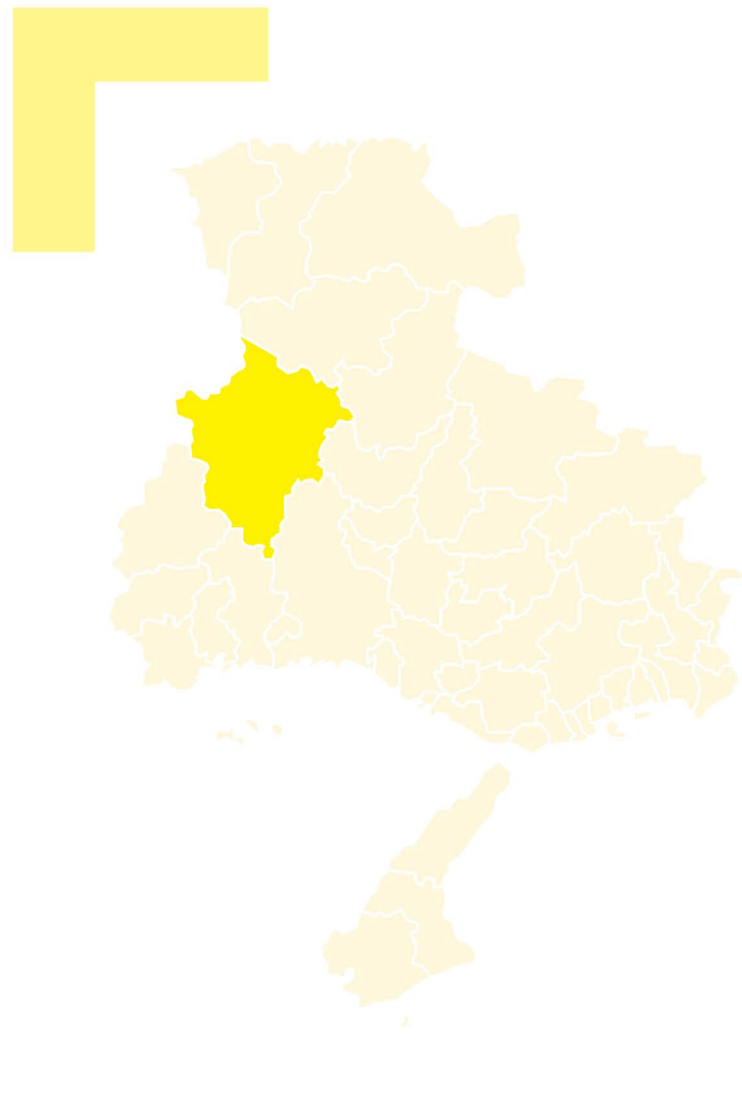
地域おこし協力隊は、“よそから来た人”

地域の人との出会いや日々の活動を通して、
地域の輪の中へと自然に溶け込んでいきます。
その出会いは、新しいアイデアや挑戦を生み出し、
イベントやプロジェクトとして形になります。

こうした小さな出会いと広がりが、
宍粟の未来を動かす力となっています。

そんな宍粟市で活躍する地域おこし協力隊を紹介します。

つながる、
ひろがる



DATA 宍粟市

兵庫県中西部に位置

面積：約 658.54km²
(東京 23区とほぼ同じ大きさ)

森林率：市域の約 9割が森林

人口：約 33,000人(2025年時点)

地域資源とまちづくり

林業が地場産業として根づいており、木材・木工製品の生産が盛んです。

さらに、地域の木に親しみ森林の大切さを学ぶ「木育」にも力を入れています。

また「日本酒発祥の地」「発酵のまち」として発酵文化を活かし、食育や健康促進にも取り組んでいます。

「森林(もり) から創(はじ) まる地域創生」をテーマに掲げ、自然資源を活かしたまちづくりが進められています。

山崎 Yamasaki

宍粟市の中心地、江戸時代には山崎城の城下町として発展。
日本酒の酒蔵をはじめ春は大歳神社の「千年藤」、秋は最上山公園もみじ山の紅葉などを楽しむ事ができる。

一宮 Ichinomiya

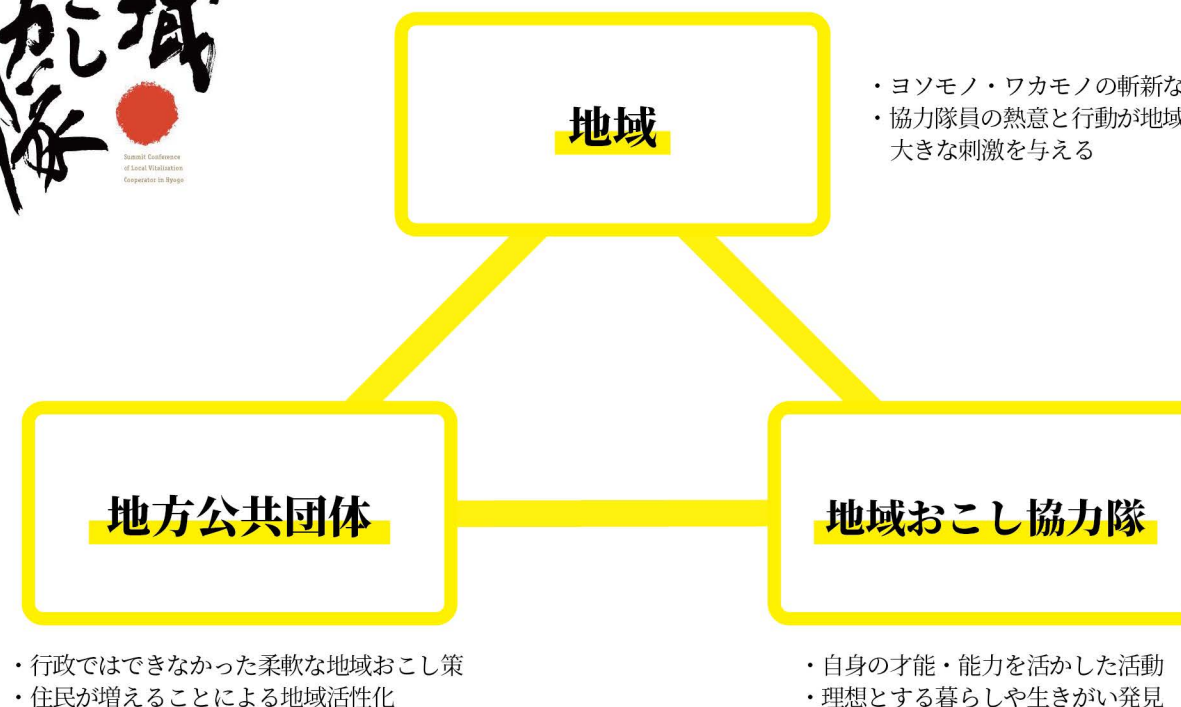
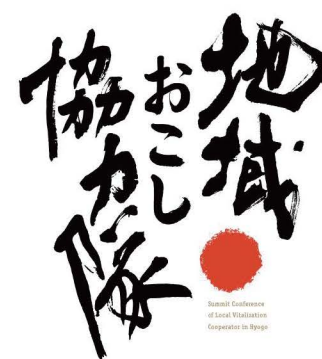
日本で初めて日本酒が造られた場所といわれる庭田神社など、歴史・文化遺産が多くあるエリア。秋には、播磨三大社の一つである伊和神社で5台の屋台が迫力ある練り合わせを行う。

波賀 Haga

森林セラピー体験や音水湖でのカヌーなどアクティビティを楽しむことができる森林豊かな波賀町。標高 456メートルの城山に築かれた波賀城からは、波賀の風景を見渡すことができる。

千種 Chikusa

宍粟市の北西部に位置し、山々に囲まれた自然豊かなまち。暖かい時期にはキャンプやグランピング、冬にはスキーなど、一年間を通して四季折々の魅力にあふれている。



引用「拓け。地域、そして自分の未来 地域おこし協力隊 Handbook」

協力隊の歩みと広がり

地域おこし協力隊は、平成21年度に89名・31自治体から始まり、令和5年度には7,200名・1,164自治体へ拡大しました。累計約16,000名が地域へ移住し、約65%が任期後も定住して地域産業を支えています。少子高齢化や過疎化が進む中、地域の担い手として重要な役割を担っています。

・隊員数は14年で約80倍

89人 → **7,200人**
平成21年度 令和5年度

・取組自治体数は15年で約37倍

31団体 → **1,164団体**
平成21年度 令和5年度

宍粟市は平成27年に地域おこし協力隊の受け入れを開始し、10年を迎えます。長年の取り組みによりサポート体制が整い、地域住民の理解も深まっています。

地域おこし協力隊の活動内容

活動内容は、農村漁業への従事や地域コミュニティ活動、地域製品の生産・加工・開発に関する活動、地域や地域製品の情報発信・PR活動などさまざま。活動を通して自己実現を果たし、より自分らしく豊かな人生を歩む隊員も生まれています。

- ・農畜産業、林業漁業への従事
- ・地域コミュニティ活動
- ・地域製品の生産、加工、開発、販売
- ・観光資源の企画、開発
- ・観光、宿泊施設の運営
- ・都市部からの移住促進
- ・教育、学習支援
- ・イベントの企画、運営
- ・空き家、空き家店舗対策、空き家活用
- ・環境保全、自然保護、鳥獣対策
- ・地域の伝統産業、技術継承



廃園の幼稚園を再生「トントウヒジマ」キャンプ場運営

20年近く使われていなかった幼稚園を改装し、日本唯一の「幼稚園キャンプ場」として生まれ変わらせた。屋外だけでなく室内でもキャンプができる点が特徴で、訪れる人に新しい体験を提供している。さらにテントサウナを導入し、川での冷水浴とあわせて楽しめる環境を整えている。地域とのつながりを大切にしながら、多様な活用方法を模索し、イベントの開催などを通じて、宍粟の森を活かした新しい交流拠点として着実に歩みを進めている。

川で“整う”テントサウナ



キャンプ場の特徴のひとつが、自然環境を活かしたテントサウナ。川の冷たい水で身体を冷やすことで、都会のサウナでは得られない爽快感を体験できる。大自然の中で楽しむサウナは空気が澄み、心身ともにリフレッシュできる特別な時間を提供している。

宍粟市アウトドア連盟での活動



発足間もない宍粟市アウトドア連盟に参加し、営業やイベント企画を担っている。地域のキャンプ場や施設と連携しながら、宍粟全体を「アウトドアのまち」として広く発信。新たな拠点づくりや観光資源の開発にも積極的に関わり、地域の未来を見据えた活動を進めている。

📍 Tonttu Hijima (トントウ ヒジマ) 〒671-2560 兵庫県宍粟市山崎町塩山 31



(公式HP)



2022年10月着任
福壽 晃希
Fukuju Koki

兵庫県播磨町出身。保険会社勤務を経て、キャンプ場オーナーとの縁から協力隊に応募し宍粟へ。幼稚園跡地を再生した「トントウヒジマ」を運営している。

「キャンプ場 × サウナ × 連盟活動」 森を舞台に、人を呼び込むアウトドア拠点づくり

「協力隊としての活動がきっかけで、自分のやりたことに挑戦できました」福壽さんはそう振り返る。着任時の大きなミッションは二つ。一つは「土万ふれあいの館」の運営、もう一つは「土万幼稚園跡地」の活用だった。幼稚園跡地は着任から半年後に「トントウヒジマ」としてオープン。以来二年半、地域内外の人々が集う拠点へと成長した。「ふれあいの館」では館長を務め、特産品やイベントで地域を盛り上げたが、2023年末に閉館。その役割を終えるまで運営に力を注いだ。

「宍粟には豊かな森があるのに、それを活かさない手はない。アウトドアを広く捉えて、誰もが楽しめる場所にしたい。」任期後もキャンプ場の運営は継続し、宍粟に暮らしながら二拠点生活を視野に入れている。地域に根を下ろしながらも、視野は常に広く、未来を見据えている。

「協力隊の三年間は、課題解決にとどまらず、町全体をどう盛り上げるかを考えられる時間でした。普通の仕事では得られない経験を積めたのは大きかったですね。」

そして、協力隊任期を終える直前のメッセージとしてこう語る。「自分のやりたことと地域のニーズが合えば、とてもいい制度です。三年間、全力で挑戦できる環境がある。だからこそ、ぜひ宍粟でチャレンジしてみてほしいですね。」



繁盛(はんせ)とフィッシングの可能性

揖保川の源流部に位置する繁盛地区は、関西屈指の溪流環境を誇る。近年は魚の減少により釣り人が減っていたが、内海さんは「この環境を活かさないのはもったいない」と感じた。クラウドファンディングで資金を集めてアマゴを放流し、500mの区間を管理釣り場として整備。「釣りを通じて地域に人を呼びたい」という思いから、キャッチ&リリースや初心者向けの釣り体験にも取り組んでいる。

釣竿づくりという原点



移住前から続けてきた釣竿製作は、内海さんの活動の原点だ。一本一本注文を受けてから仕上げるスタイルで、全国から愛好家が訪れる。自然豊かな宍粟の環境は製作に集中するには最適で、「釣竿を作って販売する拠点をもちたかった」と振り返る。協力隊卒業後も、ものづくりを柱に活動を広げていく予定だ。

パンと民泊への挑戦



協力隊の任期終了を目前にパン工房と民泊を開業。宿泊と手づくりの食を組み合わせることで、地域滞在の魅力を広げたいと考えている。「自分のやりたいことを少しずつ形にしていけたら」と、夢は民泊と釣りやパン作りなどの体験を結びつけることだ。

More 繁盛 ゲストハウス繁盛 〒671-4105 兵庫県宍粟市一宮町上岸田 576 番地



(公式HP)



2023年3月着任
内海 慶春
Utsumi Yoshiharu

兵庫県たつの市出身。サラリーマン時代に宍粟市山崎町で別荘を購入し民泊を構想。その中で、繁盛地区の自然や釣り資源に魅力を感じ、地域おこし協力隊に応募着任。

「地域おこし協力隊で描く第二の人生」

釣りを呼び水に、繁盛の自然を活かした地域挑戦

兵庫県たつの市出身の内海さん、大学を卒業後はサラリーマンとして長年働いてきたが、「最終的には脱サラして自分の好きなことをやりたい」という思いが募り、約8年前に宍粟市山崎町に別荘を購入。釣竿づくりと民泊、カフェを組み合わせた暮らしを思い描いていたが、「自前でやるとなると資金もいるしリスクも大きい」と感じていたという。

そんな時、妻が宍粟市の地域おこし協力隊の募集を見つけた。繁盛(はんせ)地区は揖保川の源流部に位置し、すぐ近くに溪流釣りの場がある。もともと釣りで何十年も前から通っていた土地でもあり、「ここから自分のやりたいことができそうだ」と感じて応募を決意した。家の近所の人もすごく親切にしてくれました」と振り返る。

着任後は、地域のブランディングとゲストハウスの運営を担当。

廃校を活用した宿は、体育館で自由に遊べる解放感があり、特にファミリー層に人気を集めている。もうひとつの柱が、繁盛川を活かした釣り場づくりだ。溪流釣りやフライフィッシングは地域の大きな資源でありながら、魚の減少で釣り人が遠のいていた。

「魚を増やすのは簡単じゃない。でも協力隊だったから漁協や地域の人に話を聞けて、一緒に取り組めたんです」と語る内海さん。放流や管理釣り場の整備、子ども向けの体験教室やプールでの釣り体験など、そうした活動も行った。

協力隊の任期終了が近く、移住前に購入していた別荘を拠点に、パン工房や民泊事業をスタート。卒業後は、釣竿制作と合わせて「釣り・宿泊・食」を結びつけた事業へと広がっていく計画だ。



宍粟アウトドア情報の発信

宍粟市にはアウトドア関連施設が 20 以上存在しているが、それを発信する手段が少なかった。そこで宍粟アウトドアマップの制作や宍粟市アウトドア地域情報サイト「SHISOMIRU」を立ち上げ、情報を発信。宍粟市のアウトドアの魅力を市外に PR している。また宍粟市アウトドア連盟のイベントや観光協会のサポートも手がけ、「宍粟市のアウトドアの面白さを市内外に伝えたい」と積極的に活動している。

地域 DMC への挑戦



協力隊任期後を見据え、自ら旅行会社を設立。「宍粟にしかない魅力をツアーにして届けたい」と語る。住民たちが紡いできた地域資源を活かし、観光資源を活用して旅行商品やサービスを企画・開発・運営する地域 DMC としての役割を担う。地域全体の観光の質を高め、持続可能な地域づくりに貢献することをめざしている。

宍粟市のアウトドアスポットを紹介する地域情報サイト「SHISO-MIRU」



(公式HP)

地域共創型の活動をめざし



観光協会や行政と協力し、コーディネーターとしての日程調整や企画運営、行政イベントのサポートスタッフ、さらに地域創生に関わるイベントでの登壇など、多彩な活動を積み重ねてきた。行政と住民の間に立つからこそ見えてくる役割を、これまでの経験を通じて培い、今後はそれを行政と地域に還元していきたいと考えている。



2023年 5月着任
広瀬 和磨
Hirose Kazuma

観光を学び、地域再生への思いを胸に宍粟市へ。アウトドアや観光PRを中心に活動し、将来は地元発の旅行会社設立を目指す。

協力隊から起業へー 宍粟で挑む新しい観光

観光を学んできた彼が、地域おこし協力隊に関心を持ったのはコロナ禍の頃だった。「やっぱり地域再生や観光に関わりたい」という思いが強く、全国の募集を探していたときに宍粟市のミッションと出会う。実際に現地を訪れると、人や自然の雰囲気心地よく、「ここでやってみたい」と感じ、迷わず応募を決めたという。不安もあったが、地域の人が温かく迎えてくれたことで安心できたそうだ。「住んでみるとスーパーも近くあって、生活面でも意外と困ることはなかったですね」と笑う。

着任後は観光情報の発信やイベントの企画運営、観光マップづくりなど、地元の魅力を伝えるPRに挑戦してきた。「やっていることが少しずつステップアップして、規模が広がっていくのがやりがい。最終的に多くの人が喜んでくれるのが一番うれしいですね」と語る。また行政や観光協会と協力し、企業研修やVR動画の撮影補助などにも携わり、人とのつながりがどんどん広がっていくことも、この活動ならではの魅力だと感じている。

今では、「宍粟市には旅行会社がないから、ここにしかない魅力を生かしたツアーをやってみよう」と自ら会社を立ち上げ、持続可能な観光事業への第一歩を踏み出した。地域の自然や文化、人の営みを観光資源としてつなぎ、地域DMCとしてツアーづくりだけでなく、地域全体の観光の質を高める役割にも挑んでいる。

「宍粟はサポートが充実していて、思いを形にしやすい場所。挑戦したい人にはぴったりだと思います」と未来の協力隊志望者に語りかける。若い世代に向けたイベントやアウトドアツアーを企画し、地域事業者や住民と協力しながら、宍粟ならではの体験を磨き上げて発信していくつもりだ。



町民一丸で実現した「波賀森林鉄道復活プロジェクト」

かつて波賀町では、町の中心の貯木場へ向け、汽笛を鳴らし、木材を運ぶ森林鉄道が走っていた。その記憶を未来へつなぐため、町の人々が手を取り合い「波賀森林鉄道復活プロジェクト」が始動した。運営は波賀元気づくりネットワーク協議会だ。彼は広報を担い、SNSで毎日5〜10件の投稿を欠かさない。波賀のこれまでの100年を、これからの100年へ——森と人の物語は、今も走り続けている。

歴史ある米作りを次世代へ繋ぐ



飯見地区の棚田で農家に学びながら米作りを行う。毎年田植え祭と収穫祭を開催し、高校生や都市部の若者も参加。地域の人々と若者たちが一緒に汗を流し、笑い合う光景は、新たな交流の形となっている。食への感謝と農業を次世代へ伝えたい。

「がはがは実行委員会」設立



「地元を好きになる」をテーマに、子どもたちが熱狂できる活動を展開。市内の若者が中心となり、遊びと学びを組み合わせた企画を実施している。仕掛け人でありながら裏方に徹し、地元の若者が自信を持って活動できる環境づくりを行っている。

📍 波賀森林鉄道 〒671-4221 兵庫県宍粟市波賀町上野1799-6



(公式HP)



2023年10月着任
田中 惣規
Tanaka Soki

東京での忙しい暮らしに疑問を抱き、宍粟市波賀町へ。地域おこし協力隊として森林鉄道の復活や若者の活動拠点づくり、米作りに挑戦し、地域と未来をつなぐ役割を担っている。

「“若者”と“こども”が紡ぐ宍粟の未来」 世代を超えて広がる、共創の地域デザイン

宍粟市波賀町で地域おこし協力隊として活動する彼は、茨城県土浦市の出身だ。幼少期は貧困家庭で育ち、高校時代には平和学習を通して社会の在り方に関心を持つようになった。大学進学後は全国をまわり、社会課題に向き合う活動を続けてきた。「大きな社会は、小さな社会から始まっている」という言葉は、様々な経験が物語っている。

コロナ禍を東京で過ごした彼は、終電で帰る暮らしの中で「自分が大事にしたいものから離れていく感覚」が芽生えたという。仕事の節目に訪れた地方で、澄んだ空気、人々の繋がり、地域をみんなで作る感覚に触れ、地方で生きる道が固まった。

活動する地域を巡る中で、友人の縁で宍粟市波賀町と出会う。住民の誇りや地域愛、初対面でも自然に受け入れてくれる人々の姿勢に感激し、移住を決めた。

着任後は「波賀森林鉄道復活プロジェクト」や「がはがは実行委員会」、「飯見地区での米作り」を中心に活動。地元の小学校や高校との連携にも積極的で、教育現場と地域をつなぐ取り組みも増やしてきた。市内外の若者と地域をつなぐ役割にも力を注ぎ、多くの若者が地域に関わるきっかけをつくっている。地元の祭りや消防団にも参加し、世代を超えた交流も欠かさなかった。

そうした活動を通じて語るのは、宍粟市が持つ「よそ者を迎える姿勢」と「多世代のエネルギー」だ。「外から来た人にも出番をつくってくれるから、また来たくなる」と笑顔で語る表情には、この地域への信頼と期待がにじむ。

「協力隊卒業後は、地域で活躍する人たちを支援する仕組みをつくりたい。また、若者が活躍できる土壌作りも変わら行いたい。子どもたちが地元の大人を見て憧れを抱いてほしいです」と笑顔で語った。この町の笑顔と地域愛が未来へつながっていくように、自分も力を尽くしたいと話す彼の眼差しは、すでに宍粟の次の時代を見据えている。



移住者インタビューで魅力を発信

協力隊のミッションとして取り組むのが「移住者インタビュー」。これまでに70人以上を取材し、その声をYouTubeやSNSで発信している。公開後には他メディアからの取材につながるケースもあり、『自分のスキルが地域に役立っている実感がある』と語る。単なる紹介にとどまらず、移住者同士や地域とのつながりを広げるきっかけを生み出している。

定住後に向け、養鶏にも挑戦



半農半Xの暮らしをめざし、プライベートでは鶏を飼い始め、卵の自給にも取り組んでいる。毎朝の収穫は新鮮で、スーパーで買うよりコストも抑えられる。小さな実践を積み重ね、「お金がなくても安心して暮らせる自給自足の生活」に一步步近づいている。現在はその延長線上で、新規就農として本格的な養鶏に挑む構想を練っている。

 楽 mag. by しそくら / 田舎暮らしと移住の魅力 (You Tube)



移住者の横の繋がりをつくる



移住者インタビューを通じて生まれるのは、地域への関心や理解だけではない。取材をきっかけに移住者同士が顔を合わせ、新しいプロジェクトに発展することもある。実際に出演者同士が集まるBBQ交流会も開かれ、互いの暮らしや思いを共有する場となった。



2023年 11月 着任

廣瀬 有哉

Hirose Yuya

元テニスコーチから地域おこし協力隊へ。映像編集やインタビューを通じて移住の魅力を発信しつつ、農業や自給自足にも挑戦している。

「半農半Xで描く新しい地域モデル」 移住者の声を発信、地方が拓く新しい生き方

神戸出身の廣瀬有哉さんは、テニスコーチや審判を経験したのち、映像クリエイターとして独立した。協力隊になる直前は兵庫県尼崎市で商店街や市場の活性化に関わり、映像編集やイベント企画を通じて地域とつながっていた。仕事の区切りがついたタイミングで空き家を探し、そこで宍粟市の地域おこし協力隊制度と出会った。「玄関を開けば一面の緑。毎日が自然に癒やされる生活になりました」と笑う。

現在の主な任務は「移住者インタビュー」。これまでに70人以上を取材し、YouTubeやSNSで公開してきた。「自分が取材したことをきっかけに、取材先のお店が今度はテレビや新聞から声をかけてもらえたんです。その時にいただいた感謝の言葉が、本当にうれしくて」と廣瀬さんは語る。移住に関心を持つ人からの問い合わせも少しずつ届くようになった。

活動は情報発信にとどまらず、果樹栽培にも取り組んできた。ブルーベリーを育て、都会へのテスト販売

を試みたり、移住前に関わっていた尼崎の商店街とのつながりを生かして卸すこともあった。現在は一例としての取り組みにとどまるが、そうした挑戦の積み重ねも廣瀬さんの歩みを形づくっている。将来的には栽培した果実を都会に届け、農業と情報発信を掛け合わせた新しい流れを生み出したいと考えている。

さらに最近ではプライベートでも鶏を飼い始め、卵の自給にも取り組むようになった。「スーパーで買うより安くて、新鮮でおいしい。小さなことでですけど、すごく豊かに感じます」と話す。日々の食卓には地域の旬の野菜や自ら育てた食材が並び、自給的な暮らしを少しずつ積み重ねている。その姿は、まさに半農半Xという新しいライフスタイルの実践そのものだ。

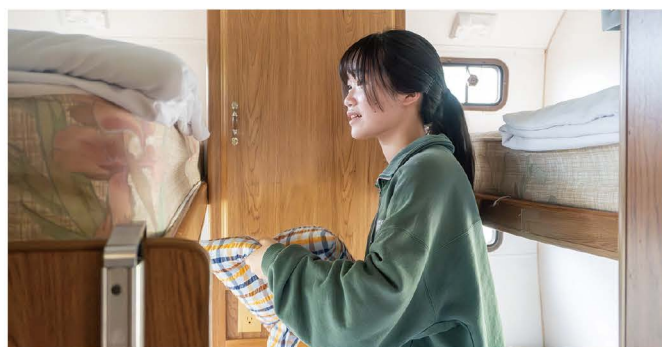
「移住をきっかけに暮らしを根本から見直せた」と話す廣瀬さん。協力隊としての活動だけでなく、プライベートでも自分らしい暮らしを築く彼の姿は、地域に新しい生き方のモデルを示している。



キャンプ場運営と地域発信

釜須さんが活動する「山崎アウトドアランド」は、標高の高い山間にあるキャンプ場。協力隊としてイベントの企画や運営、SNSでの情報発信を手がけ、利用者に自然の魅力を伝えている。さらに、トレーラーハウスの管理や備品の点検、清掃、問い合わせ対応など運営全般を担当。訪れる人が安心して楽しめる環境を整え、地域と観光客をつなぐ役割を担っている。

日常の管理とおもてなし



日常業務では、トレーラーハウスやキャンプ場全体の清掃、備品の点検、利用者への対応などを丁寧に行っている。こうした地道な管理作業が、快適で安心できる滞在環境につながり、リピーターや口コミでの利用促進にもつながっている。細やかな心配りが運営の基盤を支えている。

生き物をテーマにした企画



野鳥観察や昆虫採集など、生き物をテーマにしたイベントづくりを構想中。「生き物好きが集まれる場をつくりたい」という思いを胸に、アウトドアランドの自然を舞台にした企画を準備している。自身の経験と感性を活かし、ここでしかできない体験を提供することをめざしている。

山崎アウトドアランド 〒671-2561 兵庫県宍粟市山崎町小茅野 538-37



(公式HP)



2025年4月着任
釜須 優夢
Kamasu Yume

兵庫県西脇市出身。動物好きで専門学校を卒業後、2025年に宍粟市へ移住。地域おこし協力隊として「山崎アウトドアランド」の運営に携わる。

「地域と歩む、挑戦とはじまりの一步」 星空と生き物に囲まれて、20歳で挑む協力隊

標高の高い山間にある「山崎アウトドアランド」。澄んだ空気と満天の星空に恵まれ、野生のキツネ、ヤマドリに出会えるこのキャンプ場で、2025年春から新たな挑戦が始まった。

自然を身近に感じながら働ける環境は、日々新しい発見にあふれているという。訪れる人にとっても非日常を味わえる特別な場所だ。もともと水族館の飼育員をめざして神戸の専門学校で海や川の生き物を学んでいたが、ボランティアで宍粟市を訪れた際に山の自然の魅力を知り、「海もいいけど山の生き物もいい」と感じたことが進路を決めるきっかけとなった。

現在は、イベント企画やSNSでの発信、利用者への案内やトレーラーハウスの管理などの業務を担っている。「最大5人泊まれるトレーラーハウスには冷蔵庫やキッチンもあり、食材さえあれば気軽に泊まれます」と説明する。

移住で不安だったのは山道の運転で「ガードレールも少なく、親にも本当は大丈夫かと心配されました」と笑うが、両親からは「優夢は都会より田舎の方が合っている」と背中を押され移住を決断。暮らし始めると「神戸にいた頃より時間がゆっくり流れて、心に余裕ができました」と実感するようになった。

地域の人々からの温かい声かけにも支えられ、安心して生活に馴染むことができたという。今後は野鳥観察や昆虫採集など、生き物をテーマにしたイベントを実現したいと考えており、「好きな人は必ずいるし、ここだからこそできる企画を作りたい」と意気込む。田舎に住みたいからではなく、やりたい仕事を選んだ結果として移住した。協力隊という制度が背中を押し、自然と生き物に囲まれた暮らしを形にしている。

地域おこし協力隊になるには

STEP
01

応募資格を確認

募集要項を確認し、地域おこし協力隊応募資格を満たしているかを確認

STEP
02

募集情報をチェック！

活動内容や条件、処遇など自治体によって様々
まずは、HPなどでミッションや募集情報を確認しよう

STEP
03

活動内容の確認

応募するミッションの内容を詳細確認し、まちづくり推進課に相談。穴栗市を訪れ、ミッションの地域おこし活動に取り組む団体と活動内容を話し合う

STEP
04

書類の作成

活動内容が確認できたら申込書、誓約書を作成し、その他の添付書類を揃えて市に提出

STEP
05

選考・採用

書類審査に問題なければ一次審査合格、二次審査の面接を経て審査基準を満たせば採用が決定します。

穴栗市の募集情報はコチラ→

市民生活部 まちづくり推進課

【お問合せ】 0790-63-3123



協力隊のミッション

過去のミッション

- 「森林セラピー事業を中心とした観光振興の支援」
- 「旧千種東小を拠点とした千種町鷹巣地区の活性化支援」
- 「飯見夢むら棚田米のブランド化と獣害被害の防止」
- 「企画提案型：養蜂業を中心とした地域活性化支援」
- 「企画提案型：ヒト・モノ・コトが集まる場所づくり」

穴栗市の地域おこし協力隊は、地域ごとに設定された「ミッション」に基づいて活動します。各ミッションは地域や団体が抱える課題に応じて多様で、応募者は自らの関心やスキルに合ったミッションを選択。その後、地域住民と交流しながら課題解決や地域づくりに取り組み、地域に新たな風を吹き込んでいます。